【72】

氏　名（本籍）	櫻田涼子（東京都）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博甲第 5223 号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**家をめぐる人類学的研究** －マレーシア華人とテラスハウスの相互構築的民族誌－

主　査	筑波大学教授	Ph. D.	内山田　康
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	古家信平
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	丸山　宏
副　査	筑波大学准教授	博士（文学）	風間計博

論文の内容の要旨

本論文は、マレーシアの都市に建設された画一的なテラスハウスを人類学の研究対象とし、マレーシア華人がテラスハウスに日常的に住まう実践を通じて、所与の住宅がどのようにして華人の家へと作り替えられていくのかという問題を、住宅と家族の相互構築的な関係から捉えようとしたものである。政策的に導入されたテラスハウスは、マレーシア華人が住むことにより、そこに成員間の関係が育まれ、その関係が住宅改造に反映されることにより、新たな成員間関係が作られる家となっている。筆者はこの研究を通して、あるマレーシア華人家族が購入したテラスハウスの 23 年間の相互構築的な過程を、家族のライフサイクルの変化に合わせて行われた住宅改造と微細な日常実践の記述を通して民族誌的に描き出している。このミクロな家と家族の関係的な民族誌を通して、マレーシア華人の家の創出には、父系出自理念に関わる実践が主要な働きをしていることが確認される一方で、隠れがちな女性間親族関係も家の再生産および構成員の再生産に深く関わっていることが明らかにされる。

第 1 章「序論」では、これまで人類学の研究対象として積極的に取り上げられることが少なかった近代住宅を、民族建築学、社会学、人文地理学、建築計画学における議論を提示しながら問題の立て方を検討し、近代化の手段として政策的に導入された低価格住宅を、人類学の研究対象とする可能性とその学問的意義を提示する。その上で、レヴイ＝ストロースの「家社会」の概念に触発された新しい家研究と親族研究の議論を紹介した後、フリードマンのリニージ・パラダイムとその影響を受けた漢民族社会における親族研究の議論を整理して、テラスハウスで展開されるマレーシア華人が家を作る実践を考察する枠組みが提示される。

第 2 章「マレーシアの国土開発と住宅政策の歴史」では、まずマレー半島におけるイギリス植民地期に焦点をあてて、植民地経済を支える労働力として中国人がマレー半島に移入され、開発と都市計画が進展する過程を記述した後、20 世紀初頭のプランテーションや錫鉱山における労働者の飯場および労働者住宅の概況について述べる。次に 1947 年にシンガポール住宅評議会によって報告された独立以前のマレー半島における労働者の様々な住宅形態を概観する。その上で、植民地時代に始まった住宅政策が、独立以後のマレーシアの住宅政策に引き継がれていることが示される。 1970 年代後半から住宅団地開発が促進され、住宅福祉政策の一環として画一的な内部構造を持つ低価格住宅の供給が義務づけられた。本論文の研究対象である

テラスハウスは、こうしてマレーシア全土に造成された。

第3章「調査地概況」では、多民族国家マレーシアの民族政策を概観した後、調査地であるジョホール州T町のタマン・タワール・ジャヤ住宅団地の概況が描かれる。マレー人が町から離れたカンポンに住むことを好むのに対して、華人が住宅団地を好むこと、また華人が住宅団地に好んで住む理由が示される。2005年から2009年までの期間に調査地区に居住する住民の転出と転入を追跡した結果、一つの通りには華人が集中する一方、別の通りにはインド人が集中していったことが確認された。こうして、低価格住宅地区では、通りごとに異なる民族的な特徴と雰囲気を持つ状況が次第に作られていった。

第4章「住宅から家へ」では、低価格住宅地区のテラスハウスに居住する華人家族が、1986年に住宅を購入してから2009年までの間に、家族構成とライフサイクルの変化に伴い暮らしが変化すると共に、住宅改造が行われていった経緯を記述する。また改造後の住宅内の空間の使用の仕方が詳細に描かれる。居住者の日常実践によって、画一的に付与されていたテラスハウスの機能が少しずつ変えられていき、成員間の関係や系譜的な連続性を維持する父系出自理念の秩序を反映した家が徐々に作られていく。

第5章「家の日常」では、2006年4月のある1日に家族が朝起きて夜寝るまで、居住空間がどのように使われたのかが詳細に記述される。次に祖母が孫に示す愛情が父系出自理念と整合性を持つことが民族誌的に描き出される。この家において祖母は父系嫡子を特別に大切にすることを選択していく。祖母の孫に対する愛情は、父系出自理念が優先される家において生み出された感情であることが述べられる。最後に家の中から通りに溢れ出す日常と、これをサインとして読み取る隣人同士のやりとりについて述べられる。

第6章「一体化する住宅と人」では、この華人家族の長男の経済的独立、結婚、子供の誕生というライフサイクルの変化と、テラスハウスの改造、特に主寝室の使用者の交代、住宅前面部のテラス造成の間の相互的な関係が詳細に記述される。長男のライフサイクルの変化が住宅改造を促し、改造された住宅において居住者間の関係が変化し、この変化した関係が住宅に変化をもたらす。このようにして、住宅はそこに住まう人と相互に作用しあう過程であることが示される。そして、ライフサイクルの変化の重要な節目とそれに関連したテラスハウスの改造に現れるのは、父系出自理念であることが明らかにされる。

第7章「祖先と子孫が暮らす家」では、家で行われた長男の婚姻儀礼の過程が、家と成員を作り変える過程として描かれる。婚姻儀礼には二つの重要な側面がある。一つ目は、家にとってよそ者である嫁を家に迎え入れる参入儀礼としての側面、二つ目は、祖先と子孫が一つの系で繋がる関係にあることを成員に確認させる側面である。婚姻儀礼の記述を通して、家を次代に繋ぐ上で決定的な役割を担う嫁を儀礼的に迎え入れることは、家を維持し系譜的連続性を作る上で重要な実践であることが示される。住宅内部で象徴的に特別な意味を持つホールにおいて茶礼を行うことは、住宅に系譜的連続性と固有な過去を持たせる象徴的な儀礼実践である。テラスハウスで行われた婚姻儀礼は、画一的な住宅に固有な時間的連続性をもたらし、かけがえのない場所としての家を創出する。

第8章「移動する女性をめぐる親族関係」では、家に婚入した嫁と婚出した娘という二人の女性に焦点をあて、子供の養育をめぐって都市と故郷を頻繁に移動する実践から家がいかにして維持されるのかという点を家と家の間を移動する女性の視点から考察している。この事例を通して、婚出した女性と生家との間には強固な紐帯があることが明らかにされる。マレーシア華人の家が維持されるために、父系出自理念によって打ち消される女性親族間の繋がりもまた維持されていた。女性間親族関係の可能性を維持することは、家に不在でありながら所属することを可能にさせる女性側の戦略でもあることが示される。

第9章「結論」では、あるマレーシア華人家族の23年間に渡る住宅との交渉過程から、変化する家族が与えられた低価格住宅の空間を取り込み、これに取り込まれる絶え間ない住宅と人の相互構築的な関係が繰り返されることによって、住宅がかけがえのない家へと変化し、こうして現れた家は、父系出自理念と女性親族間の関係の両者を取り込むこと、すなわち矛盾の存立を可能とする場所となっていることが主張される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、マレーシア華人が多民族社会の中でどのようにして華人となっていくのかという問題を、民族的な特徴を持たない画一的な低価格住宅に着目し、そこに住まう華人家族と住宅の間に展開していったダイナミックな関係を追跡して、住宅が華人の家になり、そのような華人の家が華人の家族を作っていく過程を描き出そうとした野心的な研究である。本論文の主要な学問的貢献を四点挙げる。第一に、フリードマンらの主流の華人研究のように父系親族組織に着目するのではなく、またポストモダンの華人研究のようにフレキシブルなアイデンティティに着目するのでもなく、人類学の研究対象になりにくい低価格住宅を研究対象にして、これをミクロな過程として描いた着想は独創的である。第二に、華人家族のライフサイクルの主要な変化との関係において画一的なテラスハウスが改築されていく過程を、親族研究と物質文化研究を融合させた方法で記述し考察した点は人類学の華人研究に新しい可能性を開いたものとして高く評価できる。第三に、家族と家がライフサイクルの重要な節目に変化していく過程を日常と住宅改造と儀礼に着目して家の中から詳細に描き出していることは評価に値する。第四に、家では父系出自理念が働いているが、家と家の間ではこれとは対立する可能性を秘めた女性間親族関係の繋がりが働いていることを民族誌的に描き出したことは評価される。

問題点を三点挙げる。一つ目は、相互構築性に関するものである。家と人の相互構築的関係のうち、家が人を構築する側面については、充分に検討されていない。二つ目は、理論に関するものである。第１章で取り上げたレヴィ＝ストロースの「家社会」の議論と、第８章で出て来るフェミニスト人類学の親族研究の議論との間に、弁証法的な関係が充分に築かれていない。また、「実践」概念の使い方が厳密ではない。三つ目は、スケールに関するものである。事例が一つの家を中心としたものに限られていたために、マレーシア華人の「家社会」を議論するところまでは至らなかった。しかし、本論文の民族誌としての緻密さと方法論的な新しさは極めてユニークなものである。モノ研究と親族研究を融合させた本論文は、独創的な着想を持ち、家族と一体となって変化していく家の分厚い記述は学問的に高く評価される。民族的な特徴を持たない低価格住宅が、華人の家となるミクロな過程を丹念に描いた記述は質が高く、本論文の民族誌としての価値は極めて高い。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有しているものと認める。